日蓮大聖人御書全集

大田殿女房御返事

おおたどののにょうぼうごへんじ

（即身成仏抄）

そくしんじょうぶつしょう

新版1380～1384

大田殿女房御返事（即身成仏抄）

弘安3年('80) 7月2日　59歳　大田乗明の妻

八月分の八木一石、給び候い了わんぬ。

即身成仏と申す法門は、諸大乗経ならびに大日経等の経文に分明に候ぞ。しかればとて、彼の経々の人々の即身成仏と申すは、二つの増上慢に堕ちて、必ず無間地獄へ入り候なり。記の九に云わく「しかして二つの上慢、深浅無きにあらず。如と謂うは、乃ち大無慙の人と成る」等云々。

諸大乗経の煩悩即菩提・生死即涅槃の即身成仏の法門は、いみじくおそたかきようなれども、これはあえて即身成仏の法門にはあらず、その心は、「二乗と申す者は、鹿苑にして見思を断じて、いまだ塵沙・無明をば断ぜざる者が、『我はすでに煩悩を尽くしたり』と、無余に入って灰身滅智の者となれり。灰身なれば即身にあらず、滅智なれば成仏の義なし。されば、凡夫は煩悩・業もあり苦果の依身も失うことなければ、煩悩・業を種として報身・応身ともなりなん。苦果あれば、生死即涅槃とて法身如来とも

なりなん」と、二乗をこそ弾呵せさせ給いしか。さればと
て、煩悩・業・苦が三身の種とはなり候わず。
今、法華経にして、有余・無余の二乗が無き煩悩・業・苦
をとり出だして即身成仏と説き給う時、二乗の即身成仏
するのみならず、凡夫も即身成仏するなり。この法門をだ
にもくわしく案じほどかせ給わば、華厳・真言等の人々の
即身成仏と申し候は、依経に文は候えども、その義は
あえてなきことなり。僻事の起こり、これなり。
弘法・慈覚・智証等は、この法門に迷惑せる人なりとみ

候。いかにいわんや、その已下の古徳・先徳等は言うにたらず。ただし、天台の第四十六の座主・東陽の忠尋と申す人こそ、この法門はすこしあやぶまれて候ことは候え。しかれども、天台の座主・慈覚の末をうくる人なれば、いつわりおろかにてさてはてぬるか。その上、日本国に生を受くる人は、いかでか心にはおもうとも言に出だし候べき。しかれども、釈迦・多宝・十方の諸仏・地涌・竜樹菩薩・天台・妙楽・伝教大師は、即身成仏は法華経に限るとおぼしめされて候ぞ。我が弟子等は、このことをおも

い出にせさせ給え。

妙法蓮華経の五字の中に、諸論師・諸人師の釈まちまちに候えども、皆、諸経の見を出でず。ただし、竜樹菩薩の大論と申す論に「譬えば、大薬師の能く毒をもって薬となすがごとし」と申す釈こそ、この一字を心えさせ給いたりけるかと見えて候え。毒と申すは、苦・集の二諦、生死の因果、毒の中の毒にて候ぞかし。この毒を生死即涅槃・煩悩即菩提となし候を、妙の極とは申しけるなり。良薬

と申すは、毒の変じて薬となりけるを良薬とは申し候いけり。この竜樹菩薩は、大論と申す文の一百の巻に「華厳・般若等は妙にあらず、法華経こそ妙にて候え」と申す釈なり。この大論は、竜樹菩薩の論、羅什三蔵と申す人の漢土へわたして候なり。天台大師は、この法門を御らんあつて、南北をばせめさせ給いて候ぞ。

しかるを、漢土の唐の中、日本の弘仁已後、人々の誤りの出来し候いけることは、唐の第九・代宗皇帝の御宇、不空三蔵と申す人の天竺より渡して候論あり。菩提心論

と申す。この論は竜樹の論となづけて候。この論に云わく「唯真言の法の中にのみ即身成仏す。故に、これ三摩地の法を説く。諸教の中において闕いて書かず」と申す文あり。この釈にばかされて、弘法・慈覚・智証等の法門はさんざんのことにては候なり。ただし、大論は竜樹の論たることは、自他あらそうことなし。菩提心論は、竜樹の論、不空の論と申すあらそい有り。これはいかにも候え、さておき候いぬ。

ただし、不審なることは、大論の心ならば即身成仏は

法華経に限るべし。文と申し、道理きわまれり。菩提心論が竜樹の論とは申すとも、大論にそむいて真言の即身成仏を立つる上、「唯」の一字は強しと見えて候。いずれの経文に依って「唯」の一字をば置いて法華経をば破し候いけるぞ。証文尋ぬべし。竜樹菩薩の十住毘婆沙論に云わく「経に依らざる法門をば黒論」と云々。自語相違あるべからず。大論の一百に云わく「しかも法華等の阿羅漢の受決作仏は乃至譬えば、大薬師の能く毒をもって薬となすがごとし」等云々。この釈こそ、即身成仏の道理はかか

れて候え。

ただし、「菩提心論と大論とは同じ竜樹大聖の論にて候か。水火の異なりをばいかんがせん」と見候に、これは竜樹の異説にはあらず、訳者の所為なり。羅什は舌やけず、不空は舌やけぬ。妄語はやけ、実語はやけぬこと顕然なり。月支より漢土へ経論わたす人、一百七十六人なり。その中に、羅什一人ばかりこそ教主釈尊の経文に私の言入れぬ人にては候え。一百七十五人の中、羅什より先後の一百六十四人は羅什の智をもって知り候べし。

羅什来らせ給いて、前後の一百六十四人が誤りも顕れ、新訳の十一人が誤りも顕れ、また小ざかしくなりて候も羅什の故なり。これ私の義にはあらず。感通伝に云わく「後に絶え、前に光く」と云々。「前に光く」と申すは、後漢より後秦までの訳者。「後に絶ゆ」と申すは、羅什已後、善無畏・金剛智・不空等も、羅什の智をうけてすこしこざかしく候なり。感通伝に云わく「已下の諸人ならびに皆俊なり」云々。

されば、この菩提心論の「唯」の文字は、たとい竜樹の

論なりとも、不空の私の言なり。いかにいわんや、次下に「諸教の中において闕いて書かず」とかかれて候、存外のあやまりなり。即身成仏の手本たる法華経をばさしおいて、あとかたもなき真言に即身成仏を立て、あまつさえ「唯」の一字をおかるる条、天下第一の僻見なり。これひとえに修羅根性の法門なり。

天台智者大師の文句の九に、寿量品の心を釈して云わく「仏、三世において等しく三身有り。諸教の中においてこれを秘して伝えず」とかかれて候。これこそ

即身成仏の明文にては候え。不空三蔵、この釈を消せんがために、事を竜樹に依せて、「唯真言の法の中にのみ即身成仏す。故に、これ三摩地の法を説く。諸教の中において闕いて書かず」とかかれて候なり。されば、この論の次下に即身成仏をかかれて候が、あえて即身成仏にはあらず。生身得忍に似て候。この人は、即身成仏はめずらしき法門とはきかれて候えども、即身成仏の義はあえてうかがわぬ人々なり。いかにも候えば、二乗成仏・久遠実成を説き給う経にあるべきことなり。天台大師の

「諸教の中においてこれを秘して伝えず」の釈は、栴檀、栴檀。恐々謹言。

外典三千余巻は、政道の相違せるに依って代は濁ると明かす。内典五千・七千余巻は、仏法の僻見に依って代濁るべしとあかされて候。今の代は、外典にも相違し内典にも違背せるかのゆえに、二つの大科一国に起こって、すでに亡国とならんとし候か。不便、不便。

七月二日　　日蓮　花押

大田殿 女房御返事